

天草本渡二型アクセント—自発談話音声資料の分析¹

A Two-pattern Accent System in Hondo, Amakusa: Prosodic Analysis based on Corpora of Spontaneous Speech

児玉 望

KODAMA Nozomi

1 はじめに

本稿は、日本放送協会編(1999)『CD-ROM版 全国方言資料』第9巻辺地・離島編Ⅲに収録の、旧本渡市(現天草市)佐伊津の談話音声資料全文に簡略的な音声・韻律注記を施し、これを分析することにより、この方言の二つのアクセント型を、共に境界特徴をもつ語声調として解釈することを試みる。

天草本渡方言については、木部暢子(2011)が、単語と連文節の両方を含む調査票調査に基づいて、N型アクセントの一般特性を考慮したアクセント単位(名詞・用言の文節性)の特定を含む詳細なアクセント記述を行ない、二型アクセント体系であることを明らかにしている。本稿では、この分析を参照して談話音声資料を解釈し、さらにイントネーション(音韻句表示やプロミネンス、句末イントネーション)が加わった場合にどのような変異が現れるかを検討した上で、音韻解釈を行なう。木部(2011)の資料提供者の居住地である下河内地区は、『全国方言資料』の談話が収録された佐伊津地区とともに、旧本渡市北部の隣接する地区であるが、下河内地区が完全に内陸部にあるのに対し、『全国方言資料』は「漁村地区に限定した」採録が行なわれている。従って、木部(2011)のデータとの違いが方言差を反映するものである可能性もあるが、本稿では主としてイントネーションの違いによるものであるとして分析する。

談話音声資料全文への音声・韻律注記作業は、次のようなものである。

- 1、『談話音声資料』の28の音声ファイル(178p.wav~205p.wav)のすべてについて、注釈層付与ソフト ELAN 4.9.2 を用いて、二人の話者(m.と f.)の発話を二つの注釈層にカナ書きで転記する。必要に応じて、注釈部分を praat で分析する。
- 2、カナ書き転記に、以下のような印象にもとづくピッチ変化の表記を付与する。この表記は、音声表記であり、アクセントによるものとイントネーションによるものを区別せず、ピッチ変化のみに注目する。

¹ 本研究は科研費(課題番号 15K02484)の助成を受けたものである。

“[” 音節間上昇（一部は、聴覚的なモーラ間上昇）

“]” 音節間下降（一部は、聴覚的なモーラ間下降）

“[[” 後続音節の音節内上昇（一部は、聴覚的なモーラ内上昇）

“]]” 先行音節の音節内下降（一部は、聴覚的なモーラ内下降）

3、音韻解釈を加えた上で、カナ書き転記をアクセント単位に分割し、半角スペースで区切る。「アクセント単位境界削除」（後述）を”=”で表記する。

この音声・韻律注記作業を施した談話資料全文を本文の後に掲載する。ただし、著作権を考慮し、この項での共通語訳の掲載はひかえる。必要があれば冊子体を参照されたい。以下では、3の音韻解釈上、特に問題とすべき点についてまとめる。

なお、天草方言のアクセント資料として、12000語以上をアクセント記号つきで記載する有働駒雄(1980)がある。この資料は、木部(2011)や『全国方言資料』の談話音声資料とは方言差があると考え、方言語彙のアクセント型の参照以外には分析に用いていないが、このアクセント記述の特徴について簡単に触れておく。辞書の見出し項目と、一部の例文に、カナ表記の上下に線を付す形でアクセント表記が行なわれている。高さは4段階が区別され、それぞれ高い方から上線、無標、下線、二重下線で表記されている。A型とみられる語の多くは、第一音節に上線、第二音節に無標、第三音節以下に下線があり、さらに、長い複合語では後部が二重下線となっているものもある。B型とみられる語は、全体が無標のものが大多数であるが、連語については前半部に長い上線が付されて語がある。著者はやはり本渡町の出身者であるが、3音節以上の語でも上線が語頭音節にある、という点で、記述対象の方言が本稿で分析しているものとは異なると判断した。ただし、後述するように、この談話資料では、変異形によっては型の判別が難しいものがあるが、そのような音形しか談話音声資料に出現しない場合のアクセント参照には有用である。また、この語彙集は、A型の長い複合語も収録されているという点では非常に重要である可能性があるが、たとえばウシギャードリ「五位鷺」やワワンカミサマ「あめんぼう」のような例で二重下線部がアクセント単位として独立しているのか二重下線部まで含めた長いアクセント単位とみなすべきかの判断は困難である。しかし、連語の場合を中心に、複数のアクセントの可能性のある語も記述されている点が参考になる。

2 句頭の上昇とこれに続く下降－A型

この談話音声資料で特徴的なのは、句頭の短い音節がHとなり2音節目から下降する発話が非常に少ない、という点である。木部(2011)の分析では、A型のアクセント単位は2モーラ以下では1モーラ目の後、3モーラ以上では2モーラ目の後に下降が現れるとして

おり、句頭音節が H となるのは助詞を含めて 2 モーラ以下の文節が文頭に来る場合のみであるが、この場合でも 1 音節目の短音節が L, 第 2 音節が H となるものが多い。これは、句頭の位置に条件づけられた変異であるとみられる。頻出の副詞マタ「また」を例にとる。この副詞は、マ]タ、マ[タ、マ[ター]]の 3 通りの音形で現れる。下降調の現われる長母音は 2 モーラには及ばず、音声的な延長であるとみられる。

- (1) a. ホリヤ] マ]タ 「そりゃまた」 p187, p194, p196
 b. マ]タ] コー]] オトシクー]デ 「またこう落とし込んで」 p192
 c. エ[ライ] マ]タ] ワ[リヤ 「えらくまたあなた」 p195
 d. ドーイ]] マ]タ キュー[ワ 「どうしてまた今日は」 p201
 e. マ[ゴドマ] マ]タ 「孫たちはまた」 p202

このうち、句頭に現れるのは(1)bのみである。その他の句頭形は、すべて第 1 音節が低い。(1)bでは、マの全体にわたって低い位置からの上昇コントウアがあり、タの下降の幅は上昇と比べると小さい。句頭の位置にない場合は、マの上昇コントウアがない。

- (2) a. マ[タ] クッテー 「また来るよ」 p196
 b. マ[タ] キー 「またいらっしゃい」 p196
 c. マ[タ] アオーデー]] 「また会いましょう」 p198
 d. マ[タ] ア]ロ ユック[リ] アオーデー]]
 「またそれではゆっくり会いましょう」 p198
- (3) a. マ[ター]] 「また」 p181
 b. ホン] マ[ター]] ツ[ギー]] デタ=ト[ガ

「そのまた次に出たのが」 p181

これらの例から、マタのピッチ形には句内の位置が関係していることがわかる。(2)の各例では、句頭の上昇が第 2 音節まで続く。それに続く下降は、句内で後続するアクセント単位との間で起きている。(1)b との違いは、(2)a-c では後続するアクセント単位との間に修飾関係があるが、(1)b では後続する要素が間投詞的な挿入語である、という点である。ただし、(2)d では同じ条件でも上昇が 2 音節にわたっている。(3)では、マタが単独で「句」を構成しており、句内に後続のアクセント単位がない。この場合、アクセント単位末の下降をタの音節内で実現する必要があるためにタが（音声的に）延長されている、とみることが出来る。同じような句頭かどうかによる異形は、オリヤ「俺は」でも観察される。

- (4) a. オ]リヤ イッチョ] ホンド[サン 「俺はひとつ本渡へ」 p200
 b. オ[リヤ] ヨ[サ]リ オロー]] ダン [ノーツ]
 「私は夜織りましょうね」 p189

(4)a は、倒置により述語動詞の後ろに追加された部分であり、句頭の上昇がない。(4)b は、後続のヨサリ「夜」(有働によれば A 型)に句頭の上昇があるため、句末位置でもあるが、オリヤ自体が短く、音節内の下降は、ポーズを置かずに後続するヨサリの第 1 音節の低に向けての下降と区別がつかない。

このように、共に短い 2 音節から成るアクセント単位では、環境によっては A 型と B 型がともに低・高のピッチで現れうる。A 型ではこれに加えて高・低のピッチ形もあるので、型の弁別は維持されているのであるが、低・高のピッチの場合に対立が中和しているのか、あるいは何らかの弁別が可能なかどうかは、この談話音声資料だけではわからない。このような場合があるため、本稿の分析は、型所属についての記述を含んでいない。

木部(2011)はこのような揺れを明示的には述べていないが、同種の揺れが、独立する付属語であるアスペクト・マーカのトルの接続例に観察される。[ア]ケ (p50, p70~71) に対するア[ケ](p62)である。付されているピッチ図を見る限り、アに句頭の上昇の加わっている発話例であり、ケの下降は小さい。

一方、第 1 音節が長音節（促音に終わる場合を除く）の場合は、ある程度型の判別が可能である。木部(2011)では、A 型ではこの場合（促音に終わる場合を含むが「らっきょう」を例外としている。）に音節全体が高く、第 2 音節で下降するという記述を行なっている。聴覚的に妥当な判断であるが、ただし、談話音声資料では句頭においては音声的にはこの場合も音節冒頭からのピッチ上昇があり、第 1 音節が短い場合の第 2 音節に向けての句頭の上昇と並行的である。このため、韻律注記作業では冒頭に“[[”を付した。これに対して、B 型で句頭の上昇がある場合には、第 1 音節はほとんどの場合、音節全体が低平である。B 型の句頭の上昇は、この第 1 音節の低平調の直後に大きく上昇する場合、アクセント単位の最終音節で大きく上昇する場合、全体として特に目立つ部分がなくならかに上昇する場合などさまざまなパターンがあり、同じ語が複数のパターンで現れる場合も多いが、第 1 音節の内部で上昇する例は、非常に限られている。ひとつは、B 型のアクセント単位が 1 音節である場合である。

- (5) a. ナ[ン] シテカラ 「(あれ) してから」 p181
b. ナ[ン] シタリヤ [[ナイ]] 「(あれ) したらねえ」 p183
c. デ[テ] ケ[-] 「出て来い」 p183
d. ナ[ン] シゲ キタツ カーイ]] 「何をしに来たんですか」 p198

これらの例では音節内部でピッチが上昇するが、上昇に先立ってピッチの低平部が長く、聴覚的にも音節内部で低・高のピッチ変化が聞き取れる点で、A 型の高に聞き取れる音節内上昇 (“[[”とは異なる。なお、(5)の表記では、ンヤーが音節的な、先行の母音と同じ

長さをもつ発音であるように受け取られるおそれがあるが、母音の低平部が長く音節後半部で急激な上昇調となる、というタイプの上昇調を示すのみであり、音節が分割されているわけではない。

一方、B型アクセント単位の語頭の長音節がさらに延長されている場合にも同様な音節内部の上昇が現れている例がある。

(6) a. サ[[ーンジュー]] イクラ] ジャッタードー]カ]ネ

「30 いくらだったろうかね」 p178

b. サン[ジュ] ゴ[シェン] グライ [ジャッタードー [ネー]]

「35 銭ぐらいだったろうね」 p179

(7) a. ナ[[ーン]カ ヒ[ジン] ゴタル=トバ「長いひじのようなのを」 p189

b. ナン[カ] キモ]ナー

「長い着物は」 p186

(6)a と(7)a は、共に B 型アクセント単位の末音節に下降が現れている場合である。(6)b や(7)b のような発話例から B 型と推定される。B 型アクセント単位末音節の下降については次節で述べるが、(5)の 1 音節長音節の場合と同様、B 型アクセント単位第 1 音節の低平調に、第 2 音節冒頭からはじまる下降に先立つ句頭の上昇を共存させるためのピッチ形ではないかと推定される。

木部(2011)では、このほかに第 1 音節が促音に終わる長音節である A 型の 2 音節語において、第 1 音節が高、第 2 音節が低となる例を挙げているが、談話音声資料ではこの音形が現れるのは句頭の上昇を伴わない場合に限る。句頭においては、A 型と想定される動詞でも、低・高の音形となり、2 音節が共に単音節の場合と同様、A 型と B 型の区別が中和しているようにみえる語例がある。

(8) a. ヤッ[テ] イク [ト]ジ]エ

「やっ行ってけるのですよ」 p185

b. ロー[ソク]バ ツッ[テ マッ[チー]] ツ[ケ]テ

「蠟燭を釣ってマッチをつけて」 p192

c. ア[ロ] カッ[テ] ハッ[テコー

「それでは借りていこう」 p195

d. タイジ[ナ] モンダ] カッ[テー]]

「大切なものなど借りて」 p195

(8)b は第 1 音節が無声の例であるが、他の 3 例の母音は有声のままである。(8)d は発話末であるが、下降調が現れる。B 型の語ではこのような発話末の下降例はない。

第 1 モーラが高い 2 モーラの A 型アクセント単位の例として、木部(2011)には、ト]バ「戸を」のような 1 音節語を含む文節があるが、談話音声資料にある 1 音節の名詞は、A 型の「日」「矢」、B 型の「湯」のみで、いずれも、音韻論的に長母音化していると考えられる長音節の音形で現れている。いずれも助詞を伴っており、アクセント単位としては長い語

形の規則的な形である。

- (9) a. ヌッカッ[タ] ヒー]カ [ナーイ]] 「暑かった日だね」 p201
b. ユーカ[ラ] ア[ピ]ロン]] 「湯からお浴びなさい」 p202
c. [[ヤー]デモ [ケ]ー 「矢でも来い」 p203

名詞でない A 型の 1 音節語形に助詞が接続したものが句頭の上昇を伴う場合としては次の例があるが、やはり B 型と同様の低・高の音形となっている。

- (10) ネ[モ] シェ]デン]] 「寝もしないで」 p188

これらの例から、句頭の A 型アクセント単位では、上昇のピークはアクセント単位の長さに関わらず 2 モーラにあるのが標準的であり、短いアクセント単位の単独形で 1 モーラ目が高いのは、A 型アクセントのピークの後の下降を、次のアクセント単位への下降としてではなくアクセント単位内のみで実現しなければならないことによる例外的な音形であるという解釈も可能である。長音節 1 音節から成る A 型のアクセント単位は、コン「この」、ホン「その」が談話音声資料に頻出するが、これらが句頭の上昇を伴う場合には、1 音節内に共存する句頭の上昇とアクセント単位末の下降のうち、下降のほうは極めて短く聞き取りにくい発話も多い。

一方、A 型アクセント単位で句頭のピークが 2 モーラ目より後ろに現れるのは、第 1 音節が促音に終わる場合が多いが、第 1 音節が有声長音節のものが談話音声資料中に二例ある。(11)a と(13)である。

- (11) a. [[ラン[ポー] グレー]]ニ カンガエテ] ウェーテ
「ランプぐらいに考えていて」 p193
b. [[ラン]ポーツ] テ]ユーテ 「ランプとって」 p191
c. [[ラン]ポ]ワ コ[モ] ナリヨッタ] ジャツ] ケー [ネー]]
「ランプは小さくできていたんだからね」 p193

(11)a はアクセント単位の境界での下降が直後に後続する場合であり、句頭の上昇が延長され、かつ下降開始がもっとも遅くなっている 2 音節語とみることができる。なお、グレー～グライ「ぐらい」はこの方言ではアクセント上は独立する付属語であるとみることができる。

- (12) a. イ[ク]ラ グレー]]ダ シウォッタ] ケー
「いくら(B)ぐらいしていましたか」 p180

- b. サン[ジュ] ゴ[シェン] グライ [ジャッタドー [ネー]] = (6)b.

(11)a は、A 型アクセント単位の連続と見る代わりに、長い A 型アクセント単位への統合とみることにもできる。下降開始の遅れるもうひとつの例は、長いアクセント単位としか

解釈できない場合である。(13)は、2つの長音節を含む4音節から成るA型のアクセント単位に句頭の上昇が加わっている。

(13) [[ジューゴ]シェン]]モ]ナ[ゴー] ツ[ジー]タ モン [ナーイ]]

「15 銭も長く続いたものでしたね」 p179

(13)のナゴー「長く」は強調的なプロミネンスが加えられているとみられるが、この強調は、語頭音節の「低」の強調と第2音節の長母音の延長の、二つの要素をもっている。句頭の長いアクセント単位でピッチのピークが遅くなる要因としては二つ考えられる。ひとつは、音節数の多いアクセント単位では1音節あたりの長さが短くなりやすいことである。同じ長さの句頭の上昇が実現するとすれば、音節数が多ければ1音節を超える上昇となるだろう。もう一つは、A型ではこのピークの後全体に下降調を実現しなければならないことによる制約である。ピークの後が2音節程度であれば(例:フ[タ]ハ)コ「二箱」この音節連続全体が下降調となる。しかし、下降部の音節数が多くなると、ピッチ下降の大きさが音節数に関わらず同じであるとすれば1音節あたりの下降の傾斜は緩くなり、平進するB型との弁別の維持が困難になる。アクセント単位の終りまでの下降持続に意味があるとすれば、十分な下降傾斜を維持するために、下降の開始を遅らせていくほうがよい。児玉(2015b)は、隠岐3型アクセントの変異について、このような下降開始を遅らせる方向の変化を仮定し、隠岐祖形のA系列の語声調のメロディーとして、「下降式」のように下降が継続するメロディーを想定した。佐伊津方言談話音声資料では、語頭音節が短い6音節のA型アクセント単位として、アキレラシタ「あきれていらっしやった」p183、ハコメガネバ「箱眼鏡を」p194、オヤジニデモ「御主人にでも」p196の3例が出るが、いずれも2音節目でピークに達するものの、3音節目への下降が緩やかで、急な下降の開始が4音節目以降となる、という点で共通しており、下降傾斜が関与していると疑う余地があると考えられる。A型アクセント単位としては談話音声資料の中に6音節を越えるものが出ないことも、あるいはさらに検討すべき課題であるかもしれない。

3 句頭の上昇とこれに続く下降—B型

先に述べた通り、B型アクセント単位に句頭の上昇が加わる場合には、第1音節では少なくともその冒頭部に低平のコントゥアが現れるが、この後の上昇の開始位置は、第1音節末から、末音節までさまざまなタイミングがある。さらに上昇の開始位置が末音節より前の場合には、末音節全体またはその内部で下降がある場合がある。

(14) a. ワ[スレモン] バツ[カリ] スル]ケン 「忘れ物ばかりするから」 p200

b. ワス[レ]モン バツカ]リ シ]テ [ナーイ]]

「忘れ物ばかりしてねえ」 p201

(15) a. コ[トボシッ] テュー]テ

「ことぼしと言って」 p191

b. コト[ボ]シン ツ[ギ]ガ

「ことぼしの次が」 p192

(14)a-b は、共に、独立しうる付属語バツカリ「ばかり」を含む例であり、前者はこの付属語に句頭の上昇があり、後者にはない、という点と、(14)b では、冒頭から二つの B 型のアクセント単位でともに末音節が低い、という点で異なっている。さらに、(14)b のワスレモンは音節長が不均等であり、頭音節ワが全体の半分近くを占めて低平調で現れ、長音節である末音節モンは先行する短音節レよりも短い、という実現形であり、モンに現れる音節内部のピッチ下降を聞き取ることは困難である。

(15)a-b では、二つのアクセント単位が共に句頭の上昇をもつ(15)b の側で B 型アクセント単位末音節が低く、二つめのアクセント単位に句頭の上昇がない(15)a では、句の内部のアクセント単位の境界で音節間下降がある。(14)と(15)の組み合わせからみる限り、境界の種類と B 型アクセント単位末音節の下降の間に相関はない。また、話者が共通なのは(14)a と(15)b、(14)b と(15)a であるので、二人の話者がいずれもアクセント単位末音節の下降のあるピッチ形とないピッチ形を用いていることになる。

二つの音形は、予備知識がなければ別の型ではないかと分析されそうなほど異なるが、次末音節まで下降がない、という点では共通であり、句頭の上昇の実現の違いによる異音的な変異であるといつてよい。上昇を欠く句頭以外のアクセント単位では、ほぼ低平に実現しており、アクセント単位の内部でアクセント単位末に向けての下降コントゥアのある A 型と弁別が可能である。この点で上村孝二(1972)や木部(2011)の B 型を平進の型とする分析を否定するものではない。ただし、B 型を「高く始まり平らな型」とする木部(2011:54ff)の議論のうち、句頭の上昇がみられる 5 例 (p55) では、いずれも第 1 音節全体が無声であり、高起の根拠とはなりえない。談話音声資料において句頭の上昇が頭音節冒頭から実現するのは次のような詠嘆的なイントネーションの加わった例に限られている。

(16) モー] タツ[ショー]] 【ミュートバーリ】 キ[バ]ル コ[トガ] [[ネー]]

「もうたいへん達者に夫婦そろって頑張っていることがね」 p197

従って、B 型が「高く始まる」とする分析は、木部(2011:54[注 4], 56)で「(フォーカスの右側の)アクセントが弱化する」現象として言及される、句頭のない位置での低平な実現を、本来高いものからのピッチ低下の結果とみる音韻的解釈に基づいていると考える。筆者は逆に、句頭の上昇のない位置に出ている平進の音形(メロディー)をより基本的であるとする方向で分析し、B 型アクセント単位の連続での後続の低い開始を、先行 B 型アクセント単位の末尾の「境界下降」であり、B 型アクセント単位の本来の特徴に含まれると

みならず。B型アクセント単位の後の下降は、「独立する付属語」（指定の助動詞ジャやアスペクト・マーカのトル）の前で、談話音声資料でも、木部(2011)が記述するように規則的に現れ、また、B型アクセント単位が連続する場合のように、フォーカスが関与するとは考えにくい場合にも出る。

(17) a. ツケモン=シュー[ド] オモ] トツ]ト]]

「お遣い物にしようと思っているんだ」 p199

b. ショー[チュー] イッ[ペー] ナ[カドー] カーイ]]

「焼酎一杯なかりうかい」 p203

型の特徴として右側の境界特徴を認めるかどうかは、(17)aのツケモン=シューのように、二つのアクセント単位が平進する音形の解釈にも影響する。境界特徴を認める立場では、この場合は「境界削除(“=”で表記)」の過程を経ていることになる。認めない立場では、この場合が「弱化」を経ない基本形の実現ということになると思われる。

「境界特徴」については、児玉(2015a)において、九州諸方言の談話音声資料から、これをもつ方言ともたない方言があるとする解釈を提案し、この境界特徴による下降は、必ずしもアクセント単位末音節末からとは固定しないという点で、尾高型のような語末位置アクセントとは区別されるとした。本渡方言の談話音声資料において、句頭の上昇のあるB型アクセント単位の実現形で、末音節末の下降だけではなく末音節が全体が低くなる異形があるのは、「境界特徴」の定義によく当てはまる。さらに、同様な特徴をもつ近隣の方言として、型の区別のない熊本市方言の境界特徴との関係も注目される。

(18) a. フ[ナーノ] フトカ] ツ [コイ]ノ フトカ] ツ ナ[マー]ズ

「鮎の大きい、鯉の大きい、鯰」(『全国方言資料』6. p252)

b. イ[ママ]デ ト[ラレンダッタ=ケンジャ] アル] バッテン] ガ

「今まで取れなかったからではあるけれど」(同上)

熊本市方言では、アクセント単位末音節の下降に二種類が認められる。(18)a コイ]ノ「鯉の」は、句の内部でのアクセント単位境界での下降で、同じ環境での異音の変異としてコイノ]と交替する。(18)bのイ[ママ]デ「今まで」は、句の境界に先行する位置での句末音節の下降であり、休止を伴わずに句が連続する場合には、先行する句の句末に規則的に観察される。さらに、熊本市方言では、この境界特徴が現れず、複数のアクセント単位が平進で続く、筆者の言う「境界削除」現象もしばしば観察される。

(19) コ[ギャンモ=オル=モン=ダロカ]テ オモチ]カラ

「こんなにいるものだろうかと思ってね」(同上)

本渡方言談話音声資料にも境界削除と考えられるピッチ形が多く現れるが、(19)のよう

に単文の単位にまで及んでいるものは(20)の一例のみであり、これ以外は目的語+動詞活用形、名詞等+スルの動詞化、連体修飾語+被修飾語といった連文節構造がほとんどである。

- (20) ア[サギナツパノ=ハヤッタ=ジ[ブン] 「浅黄色の菜っ葉服が流行った頃」 p187
- (21) a. フロシキ=モツテキ[テ 「風呂敷を持ってきて」 p182
 b. ボ[タン=ツケテ] クレ]テ 「ボタンをつけてくれて」 p188
 c. タウ[エン=トキ] 「田植えのとき」 p180
 cf. タウ[エン] トツガ 「田植えのときが」 p180
 d. スイッ[チン=トコ]バ 「スイッチのところを」 p193
 e. ジョーアカシ=シ[テ] ヌ]ルツ 「常夜灯をともして寝る」 p193

談話音声資料の中での境界削除の特徴は、自立しうる付属語（例：バッテ「けれども」）が自立しないで統合した場合を除けば、統合の結果として生じるアクセント単位の連続がすべて B 型アクセント単位の音形をとっているという点である。同じく連文節構造で境界削除がみられる鹿児島方言では、児玉(2010)に記述したように、通常の複合語と同様、先行アクセント単位の型に応じて全体としてのアクセント単位連続の型が決まっている。本渡方言の場合、先行アクセント単位が B 型の場合にのみ境界削除が起きるのか、あるいは、先行アクセント単位の型に関わらず結果として生じる型が B 型に限るのかは、この談話音声資料だけでは判断できない。しかし、談話音声資料中の A 型アクセント単位でもっとも長いものが 6 音節以下であることとの関係が興味深い。

談話音声資料全体としては、境界削除が生じている音形は全体としてみると限られている。また、目的語+動詞活用形の場合には目的語が一語であり助詞を伴っている場合がない、というように、鹿児島方言と同様に、統語的にも統合の度合いが強いものに限られている。このことは、B 型の語声調的特徴として右側の境界特徴を考慮すべきであることを示していると考えられる。

4 語声調としての音韻解釈といくつかの問題点

以上をまとめて、二型アクセントとしての本渡方言の解釈を示す。まず、無標とみられる句音調を伴わない音形から、A 型と B 型のメロディーを次のようにまとめる。nF が非下降部、F が下降部、“}”が下降境界声調である。“+”は、音節数が増えた場合に延伸することを表わす。

- (22) A 型： 下降式 nF.(nF.)F+ B 型： 平進式+下降境界声調 nF+}

A 型では 2 音節以内の非下降部のあと、アクセント単位の終わりまで下降する。B 型で

は非下降部と次のアクセント単位に向けてのピッチ下降から成る。

句音調は、このうちの非下降部にのみ加わる。

(23) A 型： 下降式 L(.)H.F+ B 型： 平進式+下降境界声調 L.H+}~L+.H}

A 型の L(.)H は、頭音節が有声長音節であれば、この音節の上昇調として実現する。そうでなければ 2 音節にわたる。1 音節あるいは 2 音節のアクセント単位で F+を置く音節がなく、後続のアクセント単位がある場合は、F は次アクセント単位の冒頭で境界下降として実現する。下降を実現できる次アクセント単位がなければ F は末音節内部で実現する。B 型の L は、1 音節にわたって実現する。1 音節の B 型アクセント単位では、H が音節の終端部の急激な上昇で実現し、“}”は次アクセント単位の冒頭での急な下降として実現する。3 音節以上の B 型アクセント単位では、“}”が末音節の L として実現してもよい。

以上があらましであるが、このような体系では、二型の弁別が困難になる場合がある。まず、第 2 節で述べた音節数が多い場合で、この場合、A 型の F+は B 型の自然下降との弁別が困難になると考えられる。また、句頭の上昇がある場合と比べて、ない場合には下降の幅が小さくなる。この場合、句頭の上昇がある場合と比べて少ない音節数で対立が中和してしまうのではないかと考える。

さらに、逆に音節数が少ない場合には、句頭の上昇がある場合の 2 音節語（後続アクセント単位がある場合の L.H)）と 3 音節語（L.H.L）で A 型と B 型のピッチ推移が同じになる。メロディーを L や H といったレジスターの位置としてではなく全体としてのピッチコントゥアとして定義する立場から、これらの場合も L のコントゥアによって弁別が維持されていると分析できる可能性があると主張しておく。たとえば、A 型では頭音節の L が短音節でも上昇調、末音節の L が下降調となるのに対し、B 型ではいずれの場合も低平調になる、と考えるのである。談話音声資料の個別の発話例から型を判別することは無理があると思われるが、ただし、末音節の 1 音節の下降の区別については、後続アクセント単位冒頭のピッチによって弁別が可能ではないかという印象を受ける。特に、(14)b や(15)b のように、末音節が長音節の場合には低平といってもよいピッチ形になる。

なお、鹿児島市方言の A 型は末音節が低となるが、児玉(2015a)では、これを A 型の境界声調とし、末音節が高く次アクセント単位冒頭に下降を実現する B 型と、専ら境界声調によって弁別される体系とする分析を提案した。一方、Ishihara(2006)は、鹿児島市方言の B 型アクセント単位に後続するアクセント単位のピッチが A 型に後続するものより高いという実験音声学的な分析に基づいて、A 型と B 型を HL と H の二つの語声調の対立とする分析を提案している。B 型のピッチ下降が小さいとすれば、A 型では音節末まで下降が続くのに対し、B 型では次アクセント単位冒頭音節の終わりまでには平進に戻っていなければ

ばならず、下降部が短いためであると考え。児玉(2015a)では、鹿児島方言のように境界声調に2種類を弁別せず、末音節が低であっても高であってもよい体系があることを主張したが、本渡方言B型の場合、末音節が低となる場合でも高となる場合でも、アクセント単位末まで下降が続くA型と比べて、後続アクセント単位のピッチがあまり下がらない可能性があると考えている。

プロミネンスの付与については、句頭の上昇の幅を拡大している例が目につく。つまり、Hをより高くするだけでなく、句頭のLをより低く開始することも強調イントネーションの成分のひとつとなっているのである。この点は、鹿児島市方言とも似ている。ただし、鹿児島方言では冒頭の低の連続(L+)全体が低くなるのに対し、談話音声資料ではL+.H}の型の実現形でプロミネンス付与があるとみられる例は見当たらない。

二型アクセントに特徴的な音韻プロセスについては、近年研究が盛んな部分であるが、資料の性質上、いくつか観察されることを述べるにとどめる。

境界削除についての分析で言及したように、鹿児島方言では複合語と文節アクセントで前部要素の型によって全体の型が決定されることが知られるが、この現象が他の二型アクセントでも成り立つかどうかに関心を集める問題である。特に、本渡方言のように、長いアクセント単位で型の弁別が困難になりうるような体系でこのような法則性が維持できるかどうかには疑問がある。複合語と文節アクセントの構成は、ともにアクセント単位の長さを拡大する手続きだからである。

談話音声資料には、複合語がアクセント単位の統合を起こしていないとみられる例がある。(25)は、複合語であるかどうかの判断が難しいものである。

- (24) ニチ[ロ シェンソー] アガリー][ガ] 「日露戦争の後が」 p187
- (25) a. ク[ラー]シ ヨカ] 「暮らしよい」 p184
 b. ウ[ラ] オモテー 「裏地も表地も」 p189
 c. ニ]]タ[ン] ツルギ] 「二反続き」 p190
 d. ド[ギャン] ドギャン 「どんなふう」 p197
 cf. ド[ー] ドー 「どんなふう」 p197

統合が起きている長い複合語は、ほぼすべてがB型である。このうち、次の2語は前部がA型であると疑われるものである。

- (26) a. オナゴテン]バ 「おてんばな」 p203
 cf. オ[ナ]ゲー]] ナリシテ 「女になったりして」 p186
 b. ガネンメバー[サン]ノツ] テ 「がねんめばあさんなど」 p192

- cf. ガ[ネン]メツ] テュー]テ 「がねんめ(蟹の目)²とって」 p190
 ガ[ネン]] メーツ テ ウッツ[ケ]テ 「がねんめを打ち付けて」 p191

なお、A型の複合語として最も長いのはハコメガネ「箱眼鏡」である。談話音声資料に現れるA型の複合語としては次のようなものがある。(26)bの「がねんめ」は、二つの発話例で1アクセント単位に統合しているかどうか判断に迷う。

- (27) a. [[ジューゴ]シエン]モ 「15 銭も」 p179
 b. マ[イット]トキ 「もうしばらく」 p184
 c. ヘ[コ]ガ]ケ 「ゆもじ姿」 p186
 d. ウ[エ]シタ 「上下」 p187
 e. フ[タ]ゴバー]] 「双子を」 p188
 f. ハッ[タ]オリ]ガ 「機織りが」 p189
 g. ウ[チ]エンデ]], ウ[チ]エン]]ニ 「内縁で」 p189 「内縁に」 p190
 h. ウ[ス]イロト]] 「薄色と」 p190
 i. ミ[ヤ]グチン]] 「宮口の」 p191
 j. ク[ロ]マン]]デ]モ, ク[ロ]マン]]ドモ 「くろまんでも」 p201 「くろまんでも」 p202

(27)a-bは後部要素がA型である。(27)c-iは他方言との比較で前部がA型ではないかと推定される。(27)jのクロマンは「黒砂糖を原料にした小さなまんじゅう」とあり、ク[ロ]ニ「黒に」p190と結びつけられるが、この音形は型所属が決定できない。なお、有働(1980)にはクロに始まりおそらく「黒」と結び付けられる複合語が11語あるが、このうちA型と思われるアクセント表記がある語は、「黒柿」「黒ぐち(蛇)」「黒んぼ(植物)」の3語である。

このほか、アン[ジブン「あの時分」、コン[ゴラー「この頃は」、コナ[イ]ダ「この間」のように前部にA型の指示連体詞をもつものは、複合語だと解釈すればB型となる。ただし、2単位に分割して分析する可能性もある。

動詞を中心とする文節は、長いアクセント単位を規則的に形成するが、木部(2011:58)は、A型の長いアクセント単位に「低い拍が長く続くことを避けるための処置ではないかと思われる」とする興味深い音形をあげている。ア[ケ]サセラルル「あけさせられる」の規則的な型に対し、ア[ケ]ラルッ[ド]モン「あけられるだろう」のように、B型的な語末の上昇(および境界下降)をもつ型である。談話音声資料の中に現れた動詞を中心とするA型の長いアクセント単位は、これに類する境界下降をもつ2例である。しかし、「アクセント

² 有働(1980: 120)。なお、ガネ「蟹」にはA型とみられるアクセント表記が付される。

句が長くなった場合に B 型のアクセントが顕在化するという可能性もある(ibid.)」ド「だろう」などのモダリティー・マーカ―ではなく、アスペクト・マーカ―のうち、独立せず長いアクセント単位を構成するとされるヨル～オル～ウォル（進行・将然・反復）の例であるので、別の説明を考えなければならない。

(28) a. オ[リ] オライ[タ] ジャッ[ケー] 「織っておられたんですからね」 p189

b. サ[ル]キ ウォッ[タ] ジャッ[ケ] 「下げて歩いたのだから」 p192

(28)は、いずれも第 2 音節にピークがあり、A 型の長いアクセント単位にみえる。「織る」は音声資料の中で一貫して A 型と解釈できる音形で現れている。「サルク」はこの一例のみである。有働(1980)の対応項目オル(p101)、サルク～サラク～サロク(p204ff)には共に A 型とみられるアクセント表記（「織る」は「居る」と同表記）がある。従って、これらを規則的な 1 アクセント統合形とみなすこともできるのであるが、問題は、アスペクトマーカ―側で、(28)b では明確に、(28)a では微妙に、最後の音節で句頭の上昇ともみられる音形が現れている点である。この上昇ののち、後続アクセント単位ジャッケの頭音節に向けて急激な下降があるが、長い A 型アクセント単位でこのように末音節語にもっとも大きな下降の出る音形はほかにない。むしろ、規則的に予想される長いアクセント単位が、二つの句に分割されているとみると、アスペクト・マーカ―が独立する交替形が存在すると考えることになる。同じように通常は 1 アクセント単位に統合するが否定形では独立する長崎方言のヨルは、A 型のアクセント単位となるが、少なくともオライ[タ]は B 型としか解釈できない音形である。あるいは、統合した句が二つの句に分割される、というような二次的なプロセス（東京方言のワ[スレ] ラ[レナイ]「忘れられない」ハ[ナレ] ラ[レ]ナイ「離れられない」参照）も考慮しなければならない。オ[リ]オ ライ[タ] ジャッ[ケー]への分割であれば、A 型・A 型（または B 型）・B 型のアクセント単位の連続として解釈可能である。本稿ではこのように解釈したが、A 型アクセント単位のピークの後に必ずしも下降が継続しなくてもよい、という本稿の分析への反証となる可能性もあり、A 型アクセント単位の実現形の変異についてはさらに調査する必要がある。

一方、トル／ドルを伴うアスペクト形は、2 アクセント単位に分割されるのが規則形であるが、先行の動詞形が 1 音節である場合に特殊な振る舞いが観察される。

(29) a. ヤッ[トル] モン] ジャイシュー 「やっているものですから」 p186

b. ド[ギャン] ドギャン シ[トッ]タ] ケ

「どんなふうにしていましたか」 p197

c. ド[ー] ドー シ[トル]ドー]] カイ]] 「どんなふうにしていますか」 p197

d. ミン[ナ] キ[ト]ラ]ル [テー]] 「みんな来ていらっしやるから」 p204

(29)a-d は、A 型のアクセント単位として統合している。(29)a-c では先行動詞も A 型であるが、(29)d の動詞「来る」は B 型である。(30)は、先行動詞が A 型であるが、A 型のアクセント単位の連続の間にあるべきピッチの下降を欠いている。談話音声資料の中で、トルに先行する動詞形が有声長音節 1 つになる唯一の例であるが、他の動詞でどうなるかとの比較検討が必要になると思われる。

5 おわりに

以上、『全国方言資料』収録の本渡方言談話音声資料の音声・韻律注記に基づく音韻解釈をまとめた。アクセント資料としての談話音声資料は、短いものであっても、各型のさまざまな音声の実現をその現れる環境に即して収集するためにきわめて有用である。特に、二型アクセントや一型アクセントでは、型の弁別の維持という観点からは変異への制約が少ないとみられ、何が示差的特徴であるかを見極めるために、この種の談話資料の分析が不可欠であると考えられる。ただし、談話音声資料だけからアクセント体系を抽出することは、不可能とは言えないまでも非効率であることは間違いなく、語彙アクセントや連文節など、条件を統制された環境でのアクセント資料の収集と不可分の関係にある。本稿の分析も、先行研究の存在を前提とするものであり、また、ここで得られた変異形に関する仮説は、条件を統制しての調査によって実証すべきものである。たとえば、ハ[ナ]バミタが「鼻を見た」と解釈されるか「花を見た」と解釈されるかの条件の解明で、バのコントゥアが関係するかどうかを確かめることができる。条件の統制が困難なイントネーションに関する仮説は、さらに談話音声資料に基づく証拠を集積していく必要があるだろう。

さらに、ここで得られた仮説は、談話音声資料の韻律注記の方法についても検討を迫るものである。音節内上昇や音節内下降に 2 種類あるいはそれ以上の区別があり、聞き取りが可能であるとすれば、これらを区別する表記が必要であろう。また、カナ表記だけでは「時間」を表現できない。音韻的な長音表記とは別に、音量を表記する工夫も必要な場合がある。天草方言に限らず、南九州の諸方言では、同じアクセント単位の内部でも音節長が不均等になる場合が多いという印象がある。下降や上昇のコントゥアが弁別に関与するとしたら、これらを担う音節は短縮されにくいだろう。これらの表記は今後の課題である。

談話音声資料の中で観察できる揺れは、音声的な変異形には限らない。たとえば、アクセント単位の構成についても、アクセント単位が統合するか分割されるかの揺れが、筆者が「境界削除」としてまとめたもの、付属語の自立・独立、複合語のアクセント単位としての統合に及んでいる。また、「句」の切れ目を置くか、置かないか、といった韻律構造の

より上位の部分についても観察することができる。これらは、方言間での比較が可能な部分であり、より多くの方言について、談話音声資料を収集し、同様の分析を行なっていくことが今後のアクセント研究にとって重要であると信ずる。

参考文献

- Ishihara, Shunichi(2006) “Underlying Tonal Representation of Kagoshima Japanese Accentual Contrast”. In Pickett, C. (ed.), Selected papers from the 2005 Conference of the Australian Linguistics Society.
- 有働駒雄(1980)『天草の方言』本渡：印刷センター
- 上村孝二(1972)「天草島方言のアクセント」『鹿児島大学 文学科論集』7. 1-19.
- 木部暢子(2011)「天草市本渡方言のアクセント—動詞句のアクセント—」『国立国語研究所 論集』2. 49-76
- 児玉望(2010)「付属語のアクセント—鹿児島方言」上野善道監修『日本語研究の12章』明治書院. 475-489.
- 児玉望(2012)「屋久島の二型アクセント—自発談話音声資料の韻律分析」『音声研究』16-1.119-133.
- 児玉望(2015a)「九州におけるアクセント変化の再建—境界特徴に着目して」『音声研究』18-3.27-42.
- 児玉望(2015b)「隠岐三型アクセントの再検討」『ありあけ 熊本大学言語学論集』14.1-36.
- 日本放送協会編(1999)『CD-ROM版 全国方言資料』第6巻九州編
- 日本放送協会編(1999)『CD-ROM版 全国方言資料』第9巻辺地・離島編Ⅲ

ページ	開始秒	話者	注釈
178	0.6	m	アン[ジブン]
178	1.6	m	ヒトハコ] イノーテ
178	3.3	m	[[ドン] グレー]]ダ モーケウオツ[タ] ケー]]
178	5.4	f	サ[ンジツ]シエン モーケ]タリ
178	7.4	f	ゴジツ[シエン] モークル] コ[タ
178	8.6	f	ヨー[イ] ナカリウオッタ
178	10.3	f	フ[タ]ハコ イナエバ] ナー]イ
178	11.7	f	コメー] ニシワ] モーケヨッタ
178	13.6	m	アン[ジブン] サ[[ーンジュー]] イクラ] ジャッタドー]カ]ネ
178	15.3	m	コメアー
178	16.2	f	コメアー]
178	17.3	f	サン[ジュー] ゴ[シエン
179	0.1	m	サン[ジュー] ゴ[シエン] グライ [ジャッタドー [ネー]]
179	3.5	f	[[ジューゴ]シエン]モ]ナ[ゴー] ツ[ジー]タ モン [ナーイ]]
179	6.8	f	ニチ[ロ] シェンソー] アガリー]][[ガ] コンドー
179	10.1	f	ゴジツシエン
179	12.4	f	ロク[ジツシエンニ] ナッタリヤ
179	13.7	f	コリヤー]] [[モー
179	14.2	f	クイ[フ] エン[ト] ワツテ]] ソードー [ジ]タ]] コト アツ[タ]テ
179	16	m	アー トーマイ[バー] イッペン [ク[タ] コトガ] アン [ネー]]
179	18.2	f	トー[マイ]バー
179	18.8	f	ヨン]ニュー クタ] コト] アツタ] テー
179	21.7	f	ホルバツテ]カ モー]]
179	23.7	f	コ[ゲ] ナン[デモ] タツ[カ] トツ
179	25	f	キ[バ]ロー]] ダー ッテ]ユーテ]
179	26.2	f	ン[ド]マ ア]ラー
179	28.2	f	キ[バツ]タト] ワイ]]
180	0.4	m	ワー[リ]ガ タ[コバ]
180	1.5	m	イッシュケン[メー]] イ[ノー]テ イ[キ]ウオツタ[テー]]
180	3.5	m	[[ジー]ワ [[ジー]ニ
180	4.3	m	タ[コ] トツ[テ] キテ] ウェー]テ
180	5.5	m	[[アン ジ[ブン
180	6.3	m	タ[コン] イチ[パン] ヤス[カッタ] ジブンナ
180	7.7	m	イ[ク]ラ グレー]]ダ シウオツタ] ケー
180	9.3	f	ニ[シエン] ゴリン
180	10.7	m	ニシエン=ゴリン [ネー]]
180	11.2	f	イツ[シエン] ゴリン イダコ[ガ]
180	13.1	f	ホー] スルギリ
180	14.9	f	アン タウ[エン] トツガ
180	16.1	f	ゴ[シエン]ニ ナツ[タ] ワイ]]
180	17.1	m	タウ[エン=トキ] ゴシエン]ニ [ネー]]
180	17.7	f	ゴ[シエン]]ニ]]
180	19.6	f	ホイ]テ
181	0.3	f	モー
181	1.4	f	ハツ[シエン]]ニ ナツタ] トツガ
181	3	f	イツ[チパン] タウエジューデ] タツカッタ]ティ [ナー]イ
181	4.9	m	タツカツ]タ
181	5.9	f	ホレ[カラ] ボツボ]ツー]]
181	8	f	マ[ター]]
181	8.8	f	コン]] センソー]ジャ] ナン]ジャノ
181	10.1	f	ソー[ドン] ナツテカラ
181	11.2	f	トー[[シエー] ナツテカラ
181	12.7	f	コン[[ダー [モー
181	14.3	f	[[ウン]ナ ッテユーテ
181	16.2	f	ナ[ン] シテカラ

ページ	開始秒	話者	注釈
181	17.7	f	ダン[ダン]] ダンダン]]
181	18.5	f	シ[メキラレ]タ バッテ] [[ナー]イ
181	20.9	f	ヤッ[パリ] アイ]テ
181	22.1	f	モッテキテ] クレー]] ッテユーテ
181	23.3	f	コラ[ル] モン ジャイ]シェン
181	24.4	f	コッソ[リ] コッソリ
181	25.2	f	モッ[チャ] イ[キイ]キ シ[ウオッ]タ]] ワーイ]]
182	0.2	m	ソー]] ソー]]
182	1.4	f	ホー]]シテ ウェ]テ
182	2.4	f	コン[ド] モッ[テ] イケー]バ アイ]テ
182	3.9	f	[[モー
182	5.8	f	へーラ[ケー] トレ]バ
182	7	f	ジ[キー] モー
182	7.9	f	チョコッ[テ] モッ[テ] キテ フロシキ=モッテキ]テ
182	9.8	f	ハッテキ=ハッテキ=シウオ[ライ]タ] ッチャ
182	11.4	f	コ[レ]ガ イクラ コレガ] イクラ] ユーテ
182	13.5	m	アンジブン] モ[ノン] ジックウンダ
182	15	m	トッ[テ] キ[ウオッタ] ドーカ] ネー
182	16.6	f	デ [モー]] サ]レ
182	17.6	f	コ[ゲン] ヨカ]
182	18.5	f	ショーベワ] ナ[カ] ザイ ッテー
182	19.9	f	サー] イ[マ] キ[バ]ロー]]ダ
182	20.9	f	ヒトリムス[メ] ビン[ボー]] サ[シェン]]ゴ]ト ッ]テユーテ
183	0.5	f	ホー]テ] ホ]ラ キ[バッ]テ
183	1.7	m	ヨ[カ=ヨー]シン
183	1.9	f	ナ[ン] シタ]リヤ]] [[ナー]イ]]
183	2.4	m	クルゴ[ト] ジャロー
183	5.3	f	ホータ]リヤー] オ[カゲー] ドーロ=コー[ロ] ホ]ラ [モー
183	8.6	f	ヒ[チ]ニン]モ コ[ドム]ガ オ[ル]=バッテン]]
183	10.7	m	マゴドン]]ガ
183	11.3	f	キバッ[[テー
183	12.2	f	クワシェウオ[ル] ワイ
183	13.4	f	コナ[イ]ダ ア[キ]レ]ラシ]タ ワーイ
183	16	f	モー
183	17.2	f	フへ[ー]ノ アル] モナ
183	18.5	f	デ[テ] ケ[ー] ッ]テイワシ]タ] シェン
183	20.2	f	ダー]リ[モ] デ[テ] イク=モ]ナ
183	21.4	f	オ[ラン]=バッテ
183	22.1	f	オ[リ]ガ イ[タ] トッ]タ ドーモ=コー[モ
183	26	m	ドー]イ] マ] ホ[ゲン] [[ヨ]ン]ニユ コ
184	0.6	m	モツ] トバ ホ[ゲン] ユータッ]テ
184	2	m	アイ]テ] ワガドン]ガ] コッ] チャイ]ドン
184	2.1	f	コー]ユー] フー]デ] ゴ[ザース] テ モ
184	3.5	f	ナン[サム] マ[イ]ッ]ト]キ
184	4.5	f	マッ]テ] クン]ナ]ハ]レ]
184	5.5	f	ッ]テ]ユー
184	9.1	f	ホー]イ]タ]リヤ] マー]コ]テ] ホ]リヤ
184	10.6	f	ヒ[ド]カ [ナー] ッ]テ
184	11.7	f	ユート]ラ]シ]タ] バッ]テ
184	12.9	m	マ] ト[ニ] カ[ク] ホ]ン]]
184	14.2	m	イ[マン] ジ[ダイ]ト ス[ル]ギ]ン]]ニヤ [モー
184	16.1	m	ショ[テ]ー]ノ ホ[ゲン]]
184	17.4	m	ゴ[シェン]] ジッ[セン]ノ] トッ]ガ
184	18.3	m	ク[ラー]シ ヨカ]ト [ネー
184	20.6	m	モー

ページ	開始秒	話者	注釈
185	1.1	f	インチャ]] ク[ラ]シヨカ]モ
185	2.6	f	ワルカモ] ナ[イ
185	3.8	f	トキ[トキノ] ア[ゲン]ター]デ
185	5.7	f	ケッ[コー]]ニ [[ドー]ロ [[コー]ロ
185	7	f	ヤッ[テ] イク [ト]ジ]エ
186	0.5	f	オ[リヤー]] マ]ター]]
186	1.6	f	コ[ゲン] ユー]チャ] バッテ]]
186	3.7	f	モー]] [[ドー]モ=コー]モ
186	5.1	f	ワ[ガ] イエ]デ] ガー]]
186	6.4	f	ジュ[イチニンモン] カ[シレー]デー
186	8.7	f	オ[トケー] ナリ
186	9.3	f	オ[ナ]ゲー]] ナリ]シテ
186	10.2	f	ヤッ[トル] モン] ジャイ]シュー
186	11.3	f	ナン[カ] キモ]ナー ア[シモツレ] ナッテ
186	12.9	f	キ[タ]コ]タ ナ[カッ] チャ] モヌ
186	15.2	f	モー カン[ノシ]ワス] ッチャ] モー
186	17.5	f	へ[コ
186	18.2	f	へ[コ]ガ]ケ バッ[カ]リ] ジャッ]タッ] チャ] モン [ナー]イ]]
186	18.6	m	ジャルト] ジャルト] ソー]] [[ネ
186	21.4	f	ホ[レ]デ] モ ナン[カ] キモ]ナ
186	22.5	f	イッ[チヨ]モ
187	0.5	f	モ[タ]ジ] ヤッ]タ[ト] ワイ
187	1.8	m	ジャルト
187	2.7	m	ホリ]ヤ] マ]タ [モー
187	2.7	f	ホン]ナ [モー
187	3.7	m	コ[ゲン]] [[ヨー]フ]ク] ナノ]チャ
187	4.9	m	ハヤ[リヤー] シェ]ズ
187	5.4	m	ダ[レ]モ] キ[タ]=モ]ナ] オラ]ズ [ネー]]
187	7.5	m	マン[ドン]]ガ
187	8.9	m	チョー[シェン]イ]キー] シ[テ]]
187	10.2	m	ア[サギ]ナッ]パノ=ハヤ]ッタ=ジ[ブン] ア]ラー]]
187	12.2	m	イチ]エン=ゴジ]ッシェン[ガ] ト]]
187	13.2	m	ウ[エ]シ]タ ア[サギ]ナッ]パバ [[コー[テ
187	14.8	m	マー]] コ]リ]ヤ [[ヨー]フ]ク] ジェ]]ッテ
187	16.1	m	キ]テ ミ[ユ] カ]イ]] ッ]チュ[ゴ]タル [フー]ナ] マ
187	17.6	m	チョー[シ] ジャ]ッ]タ]ガ [ネー]]
187	19.3	m	ホン] マ[エ]マ]ジャー] ア]ッ]テ]]
187	20.5	m	ドン[ジェ]] ナ[ワ]オ]ビ=シ]テ] ウェ]]]テ ア]ラ
187	22.1	m	リュ]]ー[シャ]]ー] シ]テ [[チ]ョー]ド] ヨ]カ]ッ]タ]ッ] チャ]イ]ケ [ネー]]
187	23.9	f	ン] ジャ]ッ]タ] ト
187	24.5	m	モー] ホ]イ]デ
188	0.6	m	ジ[バン] テ]ユ]]ー]ギン]ニ]ャ]]ー
188	2.1	m	モー] オ[ヤ]タ]チ]ガ] ア]ラ
188	3.1	m	テ[シ]ニ]]ー]バ]]ー]]
188	3.9	m	ボ[タン]=ツ]ケ]テ] クレ]テ] ウェ]]]テ] モ]]ー
188	5.5	m	コ[ゲ]]ーン] ア]タ] ハ[ヤ]リ]ャ]]ー] シェ]ズ [ネ]]ー]]
188	7.6	m	マー]] ヌ]]ー[テ] バ[[ー]ッ]カ]リ] [ジャ]ッ]タ]ッ] ジャ]イ]ケ
188	9.3	f	ヌ]]ー[テ] バ]ッ]カ]リ]
188	9.6	m	モ] シ[タ]テ]ヤ]]ー] テ]ユ]]ー]テ]モ
188	10.6	m	チ[ゴ]サ]]ー]ノ] サ]イ]タ] イ[チ]リ]]]デ
188	12	m	ア]ス[ケー]ニ]ャ] ジェン[ノ] タ]ッカ] ケン] ヤ[ラン]] ッ]テ]ユ]]ー]テ
188	14.4	m	モー]] テ[ニ]]ー]] バ]ッ]カ]リ] ジャ]ッ]タ] ジャ]ッ]ケ]]ー]]
188	16.1	f	ン[ドン]]ム] アイ]テ [コ]ラ]]ー]]
188	17.4	f	ヨ]メ[ゴ]ギ]モ] ナ]]ー
188	19.1	f	ア]]ン]]

ページ	開始秒	話者	注釈
188	19.6	f	フ[タ]ゴバー]] コーテー]]
188	21.8	f	ネ[モ] シェ]デン]] オツ[テ] ウェーテ] アイテ-
189	0.4	f	[[モー ソ[メ]テ]]ホ]ラ
189	1.9	f	モンツ[キヤ] テ[シ] オツ[タ] ト] バイ[エー
189	4	f	ウ[ラ] オモテ
189	4.9	m	ム[カ]シヤ ハッ[タ]オリ]ガ [ネー]] ア]ラー]]
189	6.8	m	フトカー
189	7.4	m	ナ[[ーン]カ
189	8	m	ヒ[ジン] ゴタル=トバ
189	9	m	アッ[チ ヤ]リ] コッ[チ] ヤ]リ シテ
189	10.2	m	パー]タ [パ]タ テュ]テ
189	11.6	m	オ[リ]オライ[タ] ジャッ [ケー] ヨナビ
189	12.9	f	ホーイ]デ [モー
189	14.5	f	ウ[ラモンメンナ
189	15.4	f	オ[リヤ] ヨ[サ]リ オロー]] ダン [ノーツ] テ
189	17.1	f	ウ[チ]エン]デ]]
189	22.4	f	ゴムグチッ] テ]] イウオツ]タ]カ [ナーイ]]
189	23.9	f	アン]] [[ラン]ポー]]ノ
189	24.8	m	ン-]]
189	25.3	f	ゴ[ブジミッ] テ]]ユー]テ]]
189	27.8	m	ゴブラン[ポーツ] テ]ユー]テ [ネー
190	0.6	f	ア[リ]バ アイテ
190	1.6	f	ウ[チ]エン]]ニ ツ[ケ] トツ]テ ホ]ラ
190	2.9	f	タカバ[タ] オツ[テ]]
190	3.8	f	モンツ[キヤ] キ[タ]ト] バイ[イエー
190	6.4	f	ウ[ス]イロト]]
190	7.6	f	ク[ロ]ニ アイテ
190	8.6	f	ニ]]タ[ン] ツルギ] オツ]テ ウェーテ] ホ]ラ
190	11	f	ソ[メ]テ] モロー]]テ
190	12.1	f	キ[タ]ト] ジャイテ
190	13.2	m	ワイド[マ] コ[マーン]カ] トキヤ アン]]
190	14.6	m	タ[ネン] アブレー ジミ[バ] ツケテ
190	16.6	m	ト[ボシオライタツ] ジャ[ロー] モン]]
190	17.8	m	アン[ド
190	17.8	f	アン[ドン] ツ[ケ]テ [ナーイ]]
190	19.6	m	[[ホイ]カラ]ガ ガ[ネン]メツ] テユー]テ
190	21	m	シェキユダ[キ] ナッタツ チャ[カッ] ケー]]
190	22.4	f	ジャ]ル] ト
191	0.5	m	ハシ[レー] コー]]
191	1.7	m	シェキユ=イレテ]テ
191	2.5	f	ウツツ[ケテ] ウェー]テ
191	2.7	m	ガ[ネン]]メーツ テ ウツツ[ケ]テ
191	3.4	f	ノ[シェ]テ ミテ [ナーイ]]
191	3.9	m	ノ[シェ]テ]] アツテ
191	5.1	m	ホン] マ[ター]] ツ[ギー]] デタ=ト[ガ
191	6.5	m	[[ラン]ポーツ] テ]ユー]テ [ア]ラ
191	8	m	[[サン]ブ]ノ ゴ[ブ]ノ
191	8.9	m	ハチ[ブ]ノツ] テユー]テ
191	9.5	f	ン-]]
191	9.9	m	デケタツ] ジャロ] ケン [ネー]]
191	11.4	f	ミ[ヤ]グチン]]
191	12.6	f	ヨシ[ドン]ノ] イエー]ニヤ
191	13.6	f	イツマツテ[モ] ア]ラー
191	14.7	f	アンドン[バ] ツケ] トライ]]タ [ナーイ]]
191	16.2	m	ン-]] アンドン[ノ] アッター

ページ	開始秒	話者	注釈
191	17.3	f	ジミ=イ]レ[テー
191	18.4	f	トベー]][[テー
191	19.4	f	タ[ネン] アブラ]バー
191	20.6	m	ム[カ]シン]] タ ア]ラ
191	21.4	m	コ[トボシツ] テユー]テ ウェー]][[テ
191	22.5	m	コー]]
192	0.4	m	ア[ケ]テー]]
192	1.2	m	ロー[ソク]バ ツツ[テ
192	2	m	マツ[チー]] ツ[ケ]テ
192	3.1	m	マ]タ] コー]] オトシクー]デ イ[レ]テ]]
192	4.8	m	[[リョー]ホー]] コンダ] サゲテ [ウェー]]テ コー]]
192	6.4	m	サ[ル]キウオツ[タ] ジャツ[ケ] ア]ラ
192	7.6	f	ホ[ゲン]] ジャツタト] ワイ
192	10.3	f	コトボシバー[サンツ]テ イツモ] イツモ]
192	13.5	m	ガネンメバー[サン]ノツ] テ [ネー]]
192	15.5	f	ホレカ]ラ ツ[ギ]ガ [アイ]テ] ホ]レ
192	17	f	チョーチン[ニ] ナツ[タツ] チャ] モネ [ナイ]]
192	18.6	f	コト[ボ]シン ツ[ギ]ガ
192	20.3	m	ホリカ]ラ] コン デン[キ]ノ ハ[ヤリ]タチーニャー
192	22.4	m	オト[カー] ホン]]
192	23.5	m	ウ[ミン] ナカバー ア[ウオン] ウ[ミ]バ
192	25.4	m	イツ[ショー]ケンメー]] ナツ
193	0.4	m	ナツテ サルク] テー
193	1.6	m	オー[ドリ]ドマー オ[[ー]チャツ]カ
193	3.4	m	ジョーアカシ=シ[テ] ヌ]ルツ テユーテ
193	4.6	m	トー]ト
193	5.4	m	カッチン=カッチン] アン
193	6.3	m	スイツ[チン=トコ]バ ネジキツ[テ]] ウェー]テ
193	8.3	m	トー]ト デーナシニ] ナサエタ
193	9.9	m	バー[サン]モ オラ]ルト ジャイ[ケン] ネ
193	11.4	m	コン]] デン[キン] ツキハネーニャー
193	13.1	m	[[ラン[ポー] グレー]]ニ カンガエテ] ウェーテ
193	15	f	ンー
193	15.2	m	[[ラン]ボ]ワ コ[モ] ナリヨッタ] ジャツ] ケー [ネー]]
193	16.8	f	ンー]]
194	0.6	m	オキアガツ[タ] ケー]]
194	1.9	f	ハヨ] マ]タ ワ[リ] [[ジン]ベー]]ニ
194	4.9	m	キョー[ワ] アイ]]テ ド[シ]ノ
194	6.4	m	ア[ス]ビ]デ クルツ [テ]ユー]テ
194	7.7	m	イツ[チョー
194	8.5	m	ハ[コ]メ]ガ]ネ]バ
194	9.3	m	タイシェツナ (モノ) バツ]テ
194	9.9	m	カ[リ]ゲ] キタッター
194	11	f	エー ホ[リ]ャ] マ]タ
194	12.5	f	ア[ル] モ]ネ モツテ イ[カ]ジャ [ドー]イ]]
194	16.1	m	ア[ロ] [[ケー]テ ク[レー]イ
194	17.3	f	フーン]] アン] イェンノ] ハ[シ] アル[テ
194	19.1	f	モツ[テ] イ[ケー]]
195	1.6	m	ア[ロ] カツ[テ] ハツ[テ]コー
195	3	f	ンー ヨン[ニュ] トツ[テ] コン[バ] アン]]ター
195	6.4	m	シ[モー]タツ] ケー]]
195	7.6	f	オーイ エ[ライ] マ]タ] ワ[リ]ャ
195	10.2	f	イマ[[ノー
195	11.5	m	キョー[ワ] マ]] タイジ[ナ] モンダ] カツ[テー]]
195	13.7	f	イン]ネー]]

ページ	開始秒	話者	注釈
195	15	f	[[ドー]ド] ジャッタ] カイ]]
195	16.2	f	トレ[タ] カイ]]
195	16.8	m	ンー]] キューワ] モー
195	17.6	m	ナ[マコバ] チット]] トット[テ] キ[テ] ウェー]テ
196	0.3	f	ンー]] ホ[リヤ] ヨカッタ
196	2.4	m	コ[ケ] ニサンバイ] モット[テ] キ[テ] オル]テ]]
196	3.9	m	イッ[チョ] オ[ヤ]ジ]ニデ]モ カマエテ] ミテ] クレン]] カノー]]
196	5.5	f	オー ホ[リヤ] マ]タ シンボー] シ]タ] モン [パー
196	7.8	f	コレワ=コレ[ワ
196	10.6	m	タイシュツ[ナ] モ[ノ] カ[リ]ヤシ]テ
196	11.6	m	ア[リガトゴザシタ
196	12.5	m	ア[ロ] ヤ[ス]メーイ]]
196	13.3	f	イットキダ] ア[ス]パン]]カ] [[ノー
196	14.9	m	モー] オ[リ]モ イソガシユー] シ]テ ワ]リヤー]]
196	16.6	m	マ[タ] クッター
196	16.6	f	サイナラ
196	17.7	f	サイナラ] ア]ラ
196	18.5	f	マ[タ] キー
197	0.5	m	アー]]
197	1.5	m	ド[ギャン] ドギャン シ[トット]タ] ケ コン[ゴ]ラ
197	3	m	イッ[チョン] アワントーン
197	4.7	f	オカゲデ] タツ[シャ]カ イチ[リー] ワイ]] オ[リ]モ
197	6.7	m	エー]モ]] ビョーキ[ダ] [[シェンニ]ロー]] トオモー] トット[タ
197	9	f	エー]] コレワ] コレワ
197	11.1	f	ワリゲン]] ト[ナ]リ]ノ] モンドマ
197	12.3	f	ド[ー]ドー シ[トルドー]] カイ]]
197	13.6	m	ンー]]モ ア[リ]ガ]モ
197	14.8	m	モー] タツ[ショー]] [ミュートバーリ]
197	16	m	キ[バル] コ[トガ] [[ネー]]
198	0.3	f	ンー]] ホ[リヤ] エー] コ]ト
198	2.7	f	イッ[チョ]モ オ[レ]モ]] イ[カン]] ト]ジャ] モン[ネー
198	5.6	m	オイ]モ イソガシカテ
198	6.6	m	マ[タ] アオーダー]]
198	7.4	f	ンー]]
198	8.4	f	マ[タ] ア]ロ ユック[リ] アオーダー
198	11.4	m	オ[ル]ト [ケー]]
198	12.8	f	ンー オ[ル]ト]]
198	14.5	f	ナ[ン] シ]ゲ キタツ] カーイ]]
198	15.8	m	コン[ゴラー]] タ[コ=クリゲ] イ[カン]ト [ケー]]
198	17.8	f	ンー]] イ[キ]ヨ]ル] ワイ
198	19.7	m	イ[カイ]]タ]ロ イッ[チョ
198	20.7	m	タ[コバー] イッ[クワメ] バ]カイ
198	21.8	m	ク[レン]] ケ
199	0.5	m	キュー]ワ
199	1.5	f	ナニゴト] カイ
199	3.1	m	チット]ト]コー]]
199	3.6	m	ツ[ケモン=シュード] オモ] トット]]
199	5.7	f	タウエバシ] ヤー]]
199	7	m	ンー ネ[ダン]ナ]] イ[ク]ラ グ]レー ジャロ]カー]]
199	9.5	f	ンー]] タ[ウエマエニ]
199	10.5	f	ヤスカッタ] バツ]テ
199	11.3	f	モー] コン[ゴラ] ヒヤ[クエンズ]ツー
199	12.6	f	ヤ[ル]ト ワイ]]
199	13.3	m	ハイ]ハイ]] [[ホンナ]レ]バ
199	14.5	m	イッ[クワンメ] オリゲマデ

ページ	開始秒	話者	注釈
199	15.3	m	ト[ドケ]テ] ク[レン]]ケ
199	16.2	m	タ[ノム]テ
199	17	f	ンー]] コ[ド]メー]] モタヘテ] ヤ[ロー]]ダー]]
200	0.5	m	バー[サン]] [コン]] ヨ[カ] シ[ケ] イッ[チョー]]
200	2.1	m	オ[リヤー]] モ ツナケゲ
200	2.9	m	ホン[ドン] マチ[マ]デ イ[タ]テ [クー] ワーイ]]
200	4.7	f	アー]] イ[タ]テ ケ] ノー]]
200	5.9	m	ジュニャ] アッ[タドー] カーイ]]
200	7.1	f	ジェ[ニャー] アル[テ] モッ[テ=イケ] ノー] ホケー
200	9.3	m	エー] ア]ロ ヒ[トハシ]リ イ[タ]テ クー
200	11	m	オ]リヤ イッチョ] ホンド[サン
200	12.1	f	ンー]]
200	14.8	f	ナ[ーン]デモー
200	16	f	ワ[スレモン] バッ[カリ] スル]ケン
200	17.4	f	ワ[スレン]]ゴ]ト イ[タ]テ]ケ
201	0.3	m	ンー モー オ[リ]モ ト[シ [ジャイ]ケン
201	1.7	m	ワス[レ]モン バッカ]リ シ]テ [ナーイ]]
201	3	f	ンー]]
201	5	f	マゴドメ] ミヤゲ]ヤ タノム] シェン [ノー
201	7.1	m	オー ク[ロ]マン]]デ]モ
201	8.2	m	コー]テ [クー] ワーイ]]
201	9.2	m	ア[ロ] イッ[チョー] イ[タ]テ] クルター
201	10.3	f	ンー]] イタッ]ケン キツケ]テ]]
201	13.1	m	アー イ[マ] キタ バー[サン]]
201	14.5	m	ドーイ]] マ]タ キュー[ワ
201	15.8	m	ヌッカッ[タ] ヒー]カ [ナーイ]]
201	17.2	f	ンー]] イ[ク]ラ ヌッ[カッタ]ド [ノー]]
202	0.5	m	ホラホラー]]
202	1.2	m	ク[ロ]マン]]ドモ
202	1.8	m	マ[ゲー]モ] [[コー]テ キ[タ [[ゾー] ホ]ラ
202	3.1	f	イエー
202	3.7	m	マ[ゴド]マ] マ]タ
202	4.2	m	ドケー] オ]ルッ] チャイロ
202	4.8	m	ア[ス]ピ]ゲ] イタテ
202	5.4	m	ヒトー]リモ] オ]ラン]] [[ナーイ]]
202	6.4	f	ンー]]
202	7	f	ユーカラ] アブ]ル]カ
202	8	f	メシカ[ラ] クーカーン]]
202	9.4	m	アー]] モー [キュー]ワ
202	10.6	m	ヌッ[カッ]タ] ケン]]
202	11.6	m	ショー[チュー] イッ[ペー] ナ[カドー] カーイ]]
202	11.7	f	ンー]]
202	13.1	f	イン[ニャ] ショー]チューヨ]リヤ]
202	13.9	f	ユーカ[ラ] ア[ビ]ロン]]
202	14.9	m	ユーカ[ラ] ア[ベ]テ]カ]ラ ア]ロ
202	16.1	m	ショー]チュー[ニ] [[シュー]カーイ]]
202	17.1	f	ホー=]シェ[ロン]] ハヨ
203	0.5	m	アー [[トー]]]トー [ネー]]
203	2.3	m	コ]ラ] オミ[ネ] アン[ネー]]
203	3.9	m	ホン[トー [ジー]サン]タチ[ガ] マー]]
203	5.4	m	アーイ]] タッ[シャ]カ [ニン]ゲン[ノ
203	7.7	m	ホン[トー
203	8.3	m	オニ]デ[モ] ケー
203	9	m	[[ヤー]デ]モ [ケ[ー]]ッ] テゴ]タル
203	10.1	m	ニン]ゲン]デ[モ] コ]ラ

ページ	開始秒	話者	注釈
203	10.9	m	ジュ[ミョーン]] ナ[ル] ギン]ニャー
203	12.4	m	[[トー]]トー]] ホン[トー
203	15	m	オシカッタ=バツ[テ] コ]ラ]モ
203	16.2	m	コリモ シ[ヨーン]] ナ[カ] タイ]] [ネー]]
203	18.2	f	シンドー[ノ] コ]レ シ[ジン]]
203	19.6	f	サ[シェ]モシ]タ]] ワイ]] [ヨ
203	21.5	f	オナゴテン]バ [オトコマサ[リン] オ[レー
203	24.4	f	オ[リ]バ ヨメ[ゲ] モ[タイタデデ[[ナーイー]]
203	26.4	m	ンー
203	26.9	f	カ[ワイソー]ジャ] アッ[タ=バツテ
203	28.1	f	ジ[ミョー]] ナレ]バ
203	28.8	f	シ[ヨン]] ナ[カ] ワイ]]
203	29.8	f	コ]ラ]モ ホント[ニ
204	1	m	アー]] [モ
204	2.1	m	ミ[タテモ [シェー]]
204	3.7	f	ンー]]
204	5	f	コレワ=コレワ
204	7.4	m	オ[ル]ト ケー]]
204	8.3	f	[[アー]ト
204	9.2	f	イ[マ] ツ[カイ]バ ヤ[ロー]ド オモー] トツ]タラ
204	10.8	f	エ[ライ]] ヨカッタ
204	11.7	f	ハ[ヨー] ア[ガツ]テ] ク]レ ハヨー
204	12.9	f	ミン[ナ] キ[ト]ラ]ル [デー]]
204	14.1	m	アー]] コ[コ]ヘン]ナ
204	15.4	m	マー] アンノー]]
204	16.2	m	ガンジョー[カ] フネ]バ
204	17.1	m	ツクツ[テ] [[ネー]]
204	17.8	f	オ[カゲ]サマデ [ネー]]
205	0.3	f	オ[カゲ]サマデ [ネー]]
205	0.4	m	エー] フ[ネバ] ツクツ[ター
205	2.1	f	ウン]] ミンナ]ノ オ[カゲ] ヨ[カッタ] ワイ]]
205	4.2	f	ハ[ヨ] ア[ガ]レ ア[ガ]レ
205	5.2	f	ハヨー
205	6	f	ッペ] ヌー[デ
205	6.5	f	イ[ウオー]テ ク[レー]] キューワ
205	7.7	m	ア[ロー]モ
205	8.3	m	キュー[ワ] エンリョナシー] ゴツ[ツオー=クル [バ]エー
205	9.9	f	ンー]] ハ[ヨー] アガツ]テ [ク]レ] ハヨー
205	11.5	f	ア[トン] キャク]モ [アル] ケン]]